

【 講演録 】

日本人の宗教生活と仏教

竹村 牧男

はじめに

このたび、ハンガリー国ブダペストの皆様には、日本の宗教事情や仏教についてお話しさせていただく機会をいただきましたことを光栄に存じます。この機会を設けてくださいました、エトベシュ大学日本学科および国際交流基金ブダペスト日本文化センターに、甚深の謝意を表します。このたびの私のお話が、皆さんの関心を何ほどか満たし、何ほどかお役に立てれば幸いに存じます。

1. 現代日本の宗教事情

日本は、伝統文化と先端技術が共存する、独特の国柄を有しています。明治期（1868–1912）以来、欧米列国の開国要請を受けて、独立を守るために近代化に取り組み、教育・研究活動を重視し、科学・技術の発展に努めて、東アジアでは珍しく先進国の仲間入りを果たしてきました。その一方で、伝統文化の継承・発展への努力もおろそかにせず、幾多の美しい伝統芸術作品が遺されています。また、絵画・書・工芸・建築・庭園等の有形の文化財が存在するのみならず、能や茶道、香道、あるいは武道等、精神性に満ちた優れた無形の伝統文化財も、今もなお広く行われています。

宗教は文化の核にあるものですから、やはり今日の近代化された人々の生活の背景においても、大きな影響をけっして失っていないと思います。確かに、現代日本の民衆の生活様式は、最新のテクノロジーに支えられた、きわめて合理化されたものとなっています。しかし日本人は無意識のうちにも伝統的な文化的枠組み、あるいは伝統的な行動様式に深く影響されていると言って、間違いないでしょう。たとえば、新年のお正月には、大半の人々が、神社・仏閣に初詣に行きます。日頃は、ほとんど神仏への信仰など自覚していないのに、不思議に新年の初めには、皆な敬虔な心を抱くのです。夏のお盆の時期には、今も先祖への追悼の思いを新たにすることが少なくありません。春秋のお彼岸（昼と夜が同じ長さになる日）に、先祖のお墓参りをする風習は、今も残っています。生まれて一月ほどすると神社にお宮参りすること、死んだ人の追善法要を1年目・3年目・7年目・13年目等に行うことも、今なお生きています。現代日本社会に今も生きるこれらの通過儀礼のほか、豊作を祈る春のお祭り、実りに感謝する秋のお祭り等の年中儀礼も、宗教と結びついたものが少なくありません。

また、日本は四季の変化に富んだ、美しい自然を有する国ですが、その風土の中で生きる日本人は、大自然の働き（造化の営み）に対する崇敬の気持ちを抱いており、そこから無意識のうちにも人間存在を超えるものによって生かされているという感覚を有しています。それが日本人の素朴な宗教意識であると見ることも可能でしょう。日本人にとって自然は、人間の利益のために操作すべき対象、征服すべき対象なのではなく、人間の文化的・精神的生活を支えてくれる環境なのであり、相互に調和し共生すべき世界なのです。

時々、日本人は宗教的な国民ではないと言われることがあります。確かに、自覚的に信仰を持っている人は、けっして多くいません。しかしすべては人間の理性によって把握でき解決できると思っている人はほとんどおらず、大多数の人々は自然や文化を通じて、自己を超えるものへの感覚を何らか有しており、そのために、謙虚さや他者への優しさなども自然に身につけているのです。

日本人の宗教に対する関わり方について、少しデータをもって紹介してみましよう。

まず、日本人の中で、信仰を持っている人は、どのくらいいるのでしょうか。国の文化庁は、毎年、『宗教年鑑』を編んで刊行していますが、それによりますと、日本の信者は、2億人を超えるということになっています。日本の人口は1億2千

万人くらいですから、皆さんは、その信者数が2億人いるという数字は、間違いではないかと思われることでしょう。しかしこの数字も、日本の宗教事情の実情を表わすものでもあるのです。

日本には、古来の神道の神社が約8万1千あります。また、伝統的な仏教各宗派の寺院も7万7千くらいあります。神社は、それがあ地域住民全部をその神社の信徒であると見なし、その数を文化庁に報告します。寺院は、古来、関係を持っている家（檀家という）の家族全員をその寺院の信者であると見なし、その数を文化庁に報告します。日本では、江戸時代（1603–1868）に、その者がキリスト教信者でないことをお寺に証明させたことから、寺院とそれぞれの家との関係が固定的に結ばれることになり、その家の葬祭（葬式やその後の法事）は、慣行的に、そのお寺（菩提寺という）によって行われることになったのです。そこで人々は、ふだんお寺にお参りしたりしていなくても、葬式の時などには急遽、関係するお寺に頼むこととなります。こうして、神社の信徒は9800万人ほど、寺院の信徒は、8700万人ほどにのぼります。

さらに、キリスト教の信徒も多少います（230万人くらい）。新宗教の仏教教団の信徒や、神道・仏教・キリスト教以外のその他の宗教の教団の信徒もたくさんいます。その数を、それぞれの教団が文化庁に報告します。それらを合計すれば、日本の宗教信者が2億を超えるということになるのです。

日本では、昔、一つの家には、神棚と仏壇があり、神仏ともに敬われていました。今日でも、赤ちゃんが生まれた時の慣習的な儀礼は神社で行い、葬式は寺院で行い、結婚式はキリスト教教会で行うということも、珍しくありません。日本の宗教のあり方は、そのように、「重層信仰」というあり方なのです。神道も仏教も一神教ではなく、明治期（1868–1912）以前では神仏習合はごくふつうのことであり、また温和な風土に育まれた寛容な国民性があり、宗教的対立はあまりないのです。古来、「分け登るふもとの道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」という歌があります。登山道はさまざまに異なっているけれども、山頂に着いたら、同じ一つの月を見ることになるというのです。

そのように、各教団が報告する信者数を合計すると、2億ということになるのですが、では、実際にどのくらい自覚的に信仰を持つ人がいるかというと、各種宗教意識調査によれば、大体国民の20–25%くらいです。しかも、日頃、信仰に基づく宗教行動を行っている人、たとえば毎日お経を読んだり、定期的にお寺に行ってお

話を聞いたり、食前にお祈りしたりする人は、大体国民の10%程度でしょう。このような数字は、現代のヨーロッパの先進国と、大差ないのではないのでしょうか。アメリカはピューリタンが作った国で、今なおクリスチャンが大変多いですが。

そういうわけで、実際に宗教的行動をしながら生活している人は国民の1割くらいなのですが、ではこの数字をもって、日本人は余り宗教的でないと言うべきでしょうか。しかし、特定の宗教に関わりなく「宗教的な心は大事である」と思っている人は、大体3分の2ほど存在しているというデータもあります。前にも申したように、日本人はけっこう自分を超越るもの、聖なるものの存在を漠然と感じ取っているのです。そういう意味での宗教心は、日本人も有していると言い得ます。

2. 日本仏教概観

日本にある宗教は、大きく分けて、神道・仏教・キリスト教・その他の宗教があります。神道には、古来の神社で行われる祭祀を中心とした神社神道のほか、江戸時代末期から明治期にかけて発生した教派神道があります。神社神道には明確な創始者も聖典も教理体系もありませんが、教派神道各教団には、創始者がいて、聖典もあり、教理体系も調えられています。

仏教のことは、のちにまとめてお話します。

キリスト教は、江戸時代を通じて禁止されていましたが、明治初期になって禁止が解かれ、その頃から日本に浸透していきました。現在、ローマン・カトリック、東方教会、プロテスタント各派などの教団があります。特にプロテスタントは、さまざまな系統の教団が欧米から入ってきています。キリスト教系の教育機関もかなり多くあり、キリスト教は、教育・福祉・医療等において日本社会に大きな役割を果たしていますが、正式の信者は、カトリック・プロテスタント合わせて230万人くらいで推移しています。

その他の宗教とは、主に新宗教教団で、無名の大生命を讃嘆しその力にあずかるようなものが、比較的多いようです。また、既存の宗教を統合したようなものも多く見られます。

日本全国的に活動している教団は、仏教教団を含めておおよそ400くらいと見ればよいでしょう。もちろん、仏教が半分以上です。というのは、日本の仏教は、非

常に多くの宗派に分れているからです。これから、私の専門の仏教の、日本の状況についてお話します。

いうまでもなく仏教は、インドに生まれた釈尊（BC463–383）を開祖とし、その後、インドでは西暦紀元前後、大乘仏教が成立し、7世紀頃、密教が成立して、各地に伝播しました。インドの仏教自身が、すでに多彩な内容になっているわけです。それらの仏教は、西域を通じて中国に入り、中国では、中でも大乘仏教および密教が思想的に評価されていきます。また、中国で独自に、漢訳經典の『法華経』に基づいて天台宗、同じく『華嚴経』に基づいて華嚴宗が成立します。他にも、「南無阿弥陀仏」と唱える念仏を中心とする浄土教や、坐禅を中心とする禅宗がさかんになりました。

日本には、主に中国を経由して、仏教各派が入ってきます。それは奈良時代（710–794）以来、日本から学問をする僧などが中国に渡って、さまざまな仏教を修得し、日本に持ち帰ったからです。特に禅宗に関しては、鎌倉時代（1185–1333）以降、中国から日本にやって来て、本場の禅修行を伝えた者もいました。その後、それらを基に、日本人自身の仏教も創始されます。また、そうして出来た宗団から、さまざまに分派していきます。さらに、近代になって、仏教思想に基づく新宗教も多く発生しました。こうして、多くの仏教教団が存在しているのです。

日本の仏教を歴史的に概観すると、まず奈良時代の仏教としては、三論宗（インドの中観派に由来。龍樹〔ナーガールジュナ、150–250〕の思想を研究する）、法相宗（インドの瑜伽行派に由来。唯識思想を研究する）、華嚴宗（中国で成立した華嚴宗をひく）、律宗（戒律について研究する）があります。

平安時代（794–1185）の仏教としては、最澄（767–822）の天台宗と、空海（774–835）の真言宗があります。天台宗は、『法華経』と龍樹（ナーガールジュナ、150–250）の『中論』の思想を基に、隋（581–618）の時代の天台智顛が創造した思想に基づく宗派で、教理の学問と独自の瞑想（止観という）を重視します。ちなみに、『法華経』は日本でもっとも流布している經典の一つで、誰もが仏性（成仏の因になるもの）を有していること、目に見える釈尊の奥に目に見えない永遠の仏としての釈迦牟尼仏がいることなどを説いています。真言宗はインドの密教をひくもので、真言を唱えたり、大日如来を中心にその周りに多くの諸仏諸尊が描かれた曼荼羅の前で瞑想したりすることにより即身成仏（この世のうちに成仏を果たす）することを強調しています。なお、天台宗も最澄以後、密教化していきます。

鎌倉時代の仏教としては、法然（1133–1212）の浄土宗、親鸞（1173–1262）の浄土真宗、一遍（1239–1289）の時宗があり、これらはいずれも阿弥陀仏の、一切の人々を自分の国である極楽浄土にひきとるという誓願（本願）を頼りとし、念仏を中心とします。また、栄西（1141–1215）が臨済宗の禅を、道元（1200–1253）が曹洞宗の禅を中国から日本に移植しました。いずれも坐禅を中心とする禅宗ですが、臨済宗は修行者に課せられる問題（公案という。昔の禅僧の禅問答の意味を問うなど）によって修行して悟りを開くことを目指すという特徴があり、曹洞宗はただ坐禅しぬくこと（只管打坐）の中に悟りの境地を味わうという特徴があります。日本の禅宗にはこのほか、江戸時代に中国からやってきた隠元（1592–1673）がその当時の中国の禅宗を伝えた黄檗宗があります。それは、禅と念仏をともに修行する特徴がありました。また、密教化していた天台宗を、『法華経』に基づく仏教に純化しようとした日蓮（1222–1282）の仏教、法華宗（日蓮宗）があります。日蓮は、「南無妙法蓮華経」と唱える中に救いがあることを主張しました。

室町時代（1336–1573）以降、江戸時代を通じて、新たな宗旨はほぼ出てきていません。明治時代以降、大正時代（1912–1926）頃から、新宗教としての教団がたくさん発生してきます。仏教系の新宗教教団には、『法華経』信仰に基づくものが多く、密教系も多少あります。

基本的には、上述のようなのですが、それぞれの宗団から、思想的な対立、人脈的な争い、権益上の争い等から、多くの分派が生まれ、結果的に、現在、約 270 の仏教教団が存在しているわけです。その中、もっとも大きな宗団は、曹洞宗で、傘下に 1 万 4 千カ寺を擁しています。ついで、浄土真宗本願寺派（西本願寺系）が 1 万カ寺を、真宗大谷派（東本願寺系）8700 カ寺を擁しています。

日本仏教の特質について、一、二ふれますと、日本はその地理的な条件によって、インド・中国等において高度に発達した思想をそのまま受け取ることができ、しかもそこで残された問題を究明していくことができたわけですから、日本仏教がきわめて高度なものになることは、自然のことでした。仏教というとインドがもっとも中心であると考えられがちですが、実はインド仏教や中国仏教等よりも、日本仏教各宗派の教理は哲学的・思想的に非常に高度なものがあると言えます。

一方、時代的に、少なからず末法思想（釈尊の在世時代から時が経つにつれて、人々の宗教的能力が劣ったものになっていくという思想）の影響を受けているという特色もあります。この末法思想に出会う中で、仏教者が自己と他者の救いを真剣

に考えるようになったことは私たちの仏教の大きな財産です。簡単に言えば、釈尊の生きていた時代から遠ざかる時代に生きるが故に「どんな修行も行いえない身」である自己が、いかに救われるのかが、とりわけ鎌倉新仏教といわれる各宗の祖師方の思想の焦点でありました。このことはまた、一般の民衆自身の真実の救いを追求することにもほかなりませんでした。ここに、念仏（南無阿弥陀仏と唱える）すれば救われる、唱題（南無妙法蓮華経と唱える）すれば救われる、坐禅すれば救われる、といった易行の選択がなされ、それが基になってさまざまな宗派が成立したのでした。

3. 日本仏教と芸術・文化

日本の国は、千数百年もの歴史を有している国です。この間、多くの優れた芸術・文化が生み出されてきましたが、それらに触れ、その表わすところを深く理解することは、とても人生を豊かにしてくれることでしょう。たとえば仏像の前に立って、その仏様の我々衆生に対する祈りに感応するとき、人生は世間的な欲望の充足のためにのみあるのではないことを、いわば身体で感じることでしょう。あるいはまた、禅寺の枯山水の庭園を前に坐ってそれを眺め続けるとき、仏道において究明された自己と宇宙との関係、およびその根底にある心の世界になんらか参入していることでしょう。

そのように、仏教は日本のさまざまな芸術・芸道・文化、すなわち絵画・工芸・服飾・建築・庭園等、あるいは文学・お能、書道・華道・茶道・料理等々の基盤になっており、それも歴史をさかのぼればさかのぼるほど、その結びつきは深いものがあります。

それら日本の芸術・文化を見渡せば、一方に彩色豊かな雅な美意識があり、他方に単彩のわび・さびに通じる美意識があります。絵画でいえば、大和絵の伝統と水墨画の伝統があり、建築で言えば、朱塗りで豊富な彫刻を具えた東照宮のような建物もあれば、簡素で一切の無駄をそぎ取った伊勢神宮や桂離宮のようなものもあります。古来、縄文の文化と弥生の文化が併存しているのが日本文化だと言われてきましたが、それはまた仏教的に、密教の流れと禅の流れに並行するものといえるでしょう。

今回、その中でも禅が日本文化に与えた影響についてご紹介しておきましょう。特に日本の室町時代、将軍でいえば、ほぼ足利義満（1358–1408）以降の時代、禅は日本の社会や文化にきわめて大きな影響を与えています。将軍足利義満は金閣寺（1397）を造ったことで知られていますが、金閣寺は武家としての文化と、京都の公家の文化が融合した、華やかな様式を持つものでした。その時代の文化を、北山文化といいます。

その北山文化の後に、東山文化の時代が来ます。東山文化とは、将軍・足利義政（1436–1490）の時代の銀閣寺（1482 造営開始）の美学に代表される文化を呼ぶ言葉です。そこでは、華美な部分は徹底的に否定され、もっぱら地味な味わいを尊ぶものとなっています。庭園は、岩と白砂のみで作られる枯山水が主流になりました。有名な龍安寺の石庭は、1450年の作です。水墨画の大家、雪舟（1420–1506）も、この時代を生きました。文芸では、雪や氷の美を愛でた心敬（1406–1475）が、やはりこの時代です。いわば「冬の美学」が、あらゆる文化に浸透していったのです。この頃にさかんとなった禅芸術、禅文化の特質は、自然（人為的な作為を離れている）、簡素、素朴、枯淡、洒脱、無心、清浄といった言葉であらわされるものです。また、一昔前の禅思想家・久松真一（1889–1980）は、禅芸術の性格を、不均斉、簡素、枯高、自然、幽玄、脱俗、静寂、の7つの要素に分析しました。しかもこれらの7つの性格は、渾然たる一体不可分のものであると言っています。これらに、禅芸術の基本的性格を見ることができます。

禅と関係の深い芸術・文化の中、今は茶道について、少し説明してみたいと思います。日本にはお茶を飲むことを芸術化した茶道という独特の芸道が発達し、今にその伝統を誇っているのです。これは、千利休（1522–1591）によって完成されたもので、その後も利休の弟子たちがこの道を継承し、独自の文化を形成していったのです。千利休やその弟子たちは、いずれも禅僧に参禅しており、茶道において禅の精神を活かそうとしています。

日本の茶道の特徴は、あらゆる芸術を総合した、一大芸術体系を組織していることにあります。たとえば、まず茶室という建築と、それを包む庭園とがあります。茶室の床の間には、墨蹟ないし水墨画等が掛けられ（書道・美術）、花が活けられます（華道）。茶を点てる道具には、茶碗・茶入や棗・茶杓・建水・釜・炉があります。同時に、茶席（茶道のパーティ）においては、お菓子も欠かせず、本格的には懐石料理を用意することになります。それにも、漆器のお盆やお椀、陶器の皿等、

また酒器等がそろえられなければなりません。茶道においては、これらのすべてに、禅の精神が浸透しているのです。

茶道の大成者・千利休は、茶道が禅ないし仏教と深い関係にあることを常に述べていました。この茶道のめざすところは、清浄無垢の仏世界を出現させ、もてなす主と、もてなされる客とが、互いに心の汚れを離れて、清らかな心を深く通い合わせる事だと言っています。またこの茶道の極意は、ただ夏はいかにも涼しいように、冬はいかにもあたたかいように、茶はのみやすいようにするのみだ、と言っています。このような、簡素ななかの深い他者への思いやりは、禅の精神そのものなのです。

4. 日本仏教の特質

宗教というものに真剣に取り組めば取り組むほど、どの道によって救われるかが徹底的に究明されなければなりません。前に申したように、特に末法の世においては、簡易な仕方での救いが真剣に求められました。こうして、念仏するだけで救われる、唱題するのみで救われる、といった仏教が日本で創造されたのです。さらには、あらゆる行に頼ることなく、ただ信仰のみによって救われるということも主張されました。ひいては、この身このまま、仏さまの絶対的な慈悲（大悲）のはたらきによって救われるという仏教が成立してくるのです。その代表が、親鸞の浄土教です。

この日本の典型的な仏教の背景にあるものについて、それは「日本的靈性」であると指摘したのが、高名な禅者・鈴木大拙（1870-1966）でした。大拙自身は禅の人ですが、浄土真宗と関係の深い大谷大学の教授となったことから、そこで浄土教の本質を大拙なりに追求していったのでした。

大拙は第二次世界大戦終戦の前の年、1944年の暮れに『日本的靈性』を刊行します。これは日本近代の最大の哲学者で大拙の友人である西田幾多郎（1870-1945）の宗教哲学に大きな影響を与えた書物です。『日本的靈性』には禅のことも書かれています。その内容はほとんどが法然・親鸞の浄土教思想です。法然上人がそれまでの、教理の学習も修行の実践も難しい天台宗・真言宗に代わって、民衆の誰もが救われる仏教を打ち出そうとし、「南無阿弥陀仏」と称えるだけで救われるという

仏教を広めました。それは、当時の貴族から一般庶民までのあらゆる階層の人々に急速に広まったと言われていました。

法然の弟子であった親鸞は、法然の思想をさらに進めて、阿弥陀仏が一心にこの私を救おうとしていらっしゃる、その一心に出会う中で、もう救われているのだと考えます。したがって、念仏して、そのことと引き換えに救われるというのではなくります。むしろすでに阿弥陀仏に抱かれていた、救われていたと気づいて、その感謝としての念仏がおのずから出てくるのだという立場に立ったのです。いわば行の宗教から信の宗教へと進んだのでした。この法然・親鸞の思想を、『日本的靈性』において大拙は取り上げ、たとえば次のように論じています。

……親鸞は、過去世の行為に基づくこの世の苦しみから自由になることを説かない。それはこの苦しみの多い存在をそのままにして、阿弥陀仏の私たちを救うという誓願のはたらきに一切をまかせるといっているのである。こうしてここに阿弥陀仏という絶対者と親鸞一人^{いちにん}との関係を体得するのである。絶対者の大悲は、善悪を越えたものであるのだから、こちらの小さい考え、小さい善悪の行為などは救いに何の関係もないのである。ただこの身に関わるすべてのものを、捨てようとも保とうとも思わない中で、自然法爾にして大悲のはたらきに包まれるのである。これが日本的靈性の上における宗教的救済の自覚に外ならない。中国ともインドとも違って、日本的靈性のみが、過去世の行為の結果としての現在の自己を否定せずに、しかも阿弥陀仏の光に包まれ、救われるという。このような自覚は、日本的靈性にして初めて可能であった。（鈴木大拙『日本的靈性』）

中国の仏教は、念仏したら救われるという、その因果関係を超え出ることが出来なかったし、インドの仏教は救われたらそれでおしまい、輪廻を解脱したらそれでよいというような傾向が多分にありました。しかし法然—親鸞においては、苦しんでいるその苦しみから逃れようとして、自分を自分でなんとかしようとはしません。自分に対しあれこれはからうことを放棄し、この身このままで、あくまでも絶対者としての阿弥陀仏の側から包まれ、救われるのだということです。心の苦悩を断たないままに、しかも究極の安らぎの境地（涅槃＝ニルヴァーナ）を得る、そういう世界が開かれるということです。

このように、親鸞の仏教では、南無阿弥陀仏と称える念仏の行をして、そのこと

と引き換えに救ってもらおうというようなことではないのです。私がどうこうする、どうこう考えるということと無関係に、すべては阿弥陀仏のほうがかからってくださるとするのです。このような救いの自覚は、インドにも中国にもないがゆえに、日本独特のもので、それは日本的靈性である、と大拙は主張したわけです。

この「日本的靈性」について、大拙はさらに次のように解説しています。

日本的靈性が情の方面に現れたのが、絶対者の無条件の大悲の主張である。そのことを、もっとも明瞭に明かしたのが、法然一親鸞の他力思想である。絶対者の大悲は悪によって妨げられることもく、善によって開発されることもないほどに、絶対に無条件——すなわち人間の考えを超越しているということは、日本的靈性でなければ経験されないものである。

大拙は、この日本的靈性というものは、日本人が島国で何百年にわたって共同生活を送ってきたその中で、独自に形成されてきたものである、とも言っています。また、こういったスピリチュアリティ（靈性）は、大地に触れることによって始めて体得できるのであって、都の文明的な生活を送っている限りは体得できないのだ、とも強調しています。したがって、『日本的靈性』のもう一つのテーマは、「大地性」ということになります。

大地は母のようにすべてを受け入れる。汚いものすらも受け入れてしかも浄化していく。あるいは生命を育てていく。確かに大地にはそういう母性的なところがあります。我々は大地において仏のいのちと人間の交流を経験すると言ってもよいかもしれません。そういう大地の深い愛情を体得する中で、仏の無条件の大悲を感得することもできる。自己を超えたもの・聖なるものから発せられる人々に対する愛情、そういうものが実は我々のいのちの根底にある、それこそが靈性なのだということをお大拙は指摘するわけです。

このような、仏の絶対無条件の大悲に抱かれていることに基づく救いの感覚は、実は真宗だけにでなく、あらゆる日本仏教の基盤にあると言えるのではないかと思います。大日如来を本尊とする密教にもそういう面がありますし、自力の典型と見られている禅もまた、むしろ思慮・分別を否定し、自力を手放す点で、他力に通じるものがあります。私は、この「仏の無条件の愛」を心に感じるのが、日本仏教に共通の特質であると言えるのではないかと考えております。

まとめ

日本人で、明確に信仰を持って宗教的行動を行っている人は1割程度であり、地球上の多くの国の国民に比べて少ないことと思います。しかし漠然とした宗教心はけっこう広く浸透しており、特に自然を通じての、自己を超えるもの・聖なるものへの感覚は、案外、深いものもあると言えます。

日本は歴史が長く、この間、宗教弾圧はなかったため、古来の宗教、新興の宗教等、多くの宗教団体があり、相互に寛容であり、互いに尊敬し合い認め合っています。もともと重層信仰の文化があり、神仏をともに拜むことに違和感はありません。

中でも古来の宗教である神道や仏教は芸術・文化に深くかかわっており、多彩な、優美な作品をたくさん産み出し、現代に伝承されています。特に中世には禅宗が社会・文化に大きな影響を与え、15世紀後半には、水墨画、石庭、能楽、茶道、武道等の文化を根底から支えました。その伝統は、今に生きています。

日本人の宗教心の特徴として、「誰もが、仏による絶対無条件の愛（大悲）に包まれて、この身このまま救われる」という感覚があることを、鈴木大拙は指摘しました。大拙は、その宗教意識を、「日本的霊性」と名づけました。私は、そういう霊性は、あらゆる日本の宗教の基盤にあると思います。おそらくこのような宗教意識は、未来の地球社会の平和を導く思想にもなりうることでしょう。

以上で、私の拙いお話を終えます。ご清聴、まことにありがとうございました。

(竹村牧男：東洋大学学長)